牛河梁遺跡考古発掘報告

（1983 ~ 2003 年度）

（要　旨）

牛河梁遺跡はおおよそ紀元前 3500 年頃のもので、多くの遺跡から構成されている。新石器時代遺跡群であり、紅山文化に属す。中国東北地区南部、遼寧省の西部に位置する。遺跡の面積は56 平方キロメートルをなす。遺跡の範囲は東経119°27′~119°34′、北緯41°16′~41°16′~41°22′である。地理座標の中心点は東経 119°30′、北緯 41°20′である。この一帯は大興安嶺支脈ヌルジコ山の山間丘陵地帯で、山間には東北から西南に延びる多くの山稜がある。海抜は550 ~ 650mの間にある。それぞれの遺跡は山稜頂部の山頂部に位置している。

牛河梁遺跡内には既に紅山文化の遺跡が43カ所発見されており、1983 ~ 2003 年の発掘期間に16 箇所の地点名（N1 ~ N16）が付けられている。本発掘報告の主要な内容は、既に正式な発掘が行われた4 地点、すなわちN2、N3、N5、N16からなる。これら4 地点はすべて積石塚遺跡である。N2とN5はさらに祭祀用基壇遺構を含む。

地層関係は、N16が紅山文化の文化層の上に夏家店下層文化層が堆積している以外は、みな紅山文化の単純層である。ただN2とN3の表土層中には戦国時代の土器片や、N3 環濠内には比較的多くの戦国遺物がある。紅山文化層はもともと時期差の区分が存在する。その中で、積石塚は下層と上層の2 段階に分けられ、下層積石塚の下にはさらに紅山文化の堆積が見られる。このように牛河梁遺跡は、既に正式に発掘された4 地点の遺跡で早期堆積、下層積石塚、上層積石塚の合計3 期の堆積からなっている。

早期堆積は発掘した4 地点でみな発見されているが、第 5 地点がやや多く、多くは貯蔵穴をなす。出土したのは磨製石斧や細石器などの石器、泥質紅陶や彩陶鉢、盆、甕、“之字文”の押印文からなる夾砂灰褐陶の筒形罐などの土器である。その多くは内蒙古赤峰一帯の紅山文化中期あるいはやや古い紅山文化居住地に見られるものと同じかごく近いものであり、当時の牛河梁一帯は積石塚が構築される前から、既に紅山文化の人々がこの一帯で活動していたことを物語っている。

下層積石塚はN2、N5、N16で発見されている。しかしN3では下層積石塚が残っておらず、ただ下層積石塚の筒形土器のみが発見された。N2Z4の下層積石塚は比較的保存状況がよく、10 基が発見されている。積石塚の形状は円形が多く、個々に方形あるいは長方形をなし、規模はやや小さく、円形の積石塚は直径 5メートルほどである。墳丘は平坦で起伏ははっきりせず、多くは細かく砕かれた石塊で葺かれている。それらは東西に配列され、その配列はすべてで3 列からなることが見出される。積石塚は多くは1 基の埋葬からなり、埋葬位置は墳丘の中心で、みな土壙墓からなる。土壙墓内には板石が数枚立てられ、不規則な石室を構成する。単体埋葬であり、仰身伸展葬と二次葬に分かれ、頭位は南北方向で、墳丘の周囲には一列に筒形土器が円形に配置されている。副葬品の内容は以下のように分かれる。甕と罍がそれぞれ1 個のみ副葬された墓が3 基であり、甕あるいは罍は比較的大きく、罍には加彩されかつ器蓋が伴う。玉器が副葬された墓は3 基で、みな1 個の斜口筒形玉器からなる。その中の1 基には1 個の蓋付き甕があり、その他の2 基の墓にはただ玉器のみが副葬される。その他の墓葬には副葬品がない。

上層積石塚はこれら4 地点の主要な堆積を為す。埋葬部と埋葬部の上はすべて石塊を積み上げて墳丘が作られている。墳丘は石を積み上げた墳丘基壇と墳裾からなる。現在残っている墳丘基壇は、N2Z1の2 基の大墓の周囲に見られ、N2Z2とN5Z1の中心大墓の墓壙上に位置し、墳丘基壇より上は石塊を積み上げるか先に封土した後に石を置き、規模が大きな墳丘

を形成し、墳丘基壇の外側には石積み階段式の墳裾がある。N2とN5は積石塚と祭壇が組み合わさっている。N3とN5では積石塚の外側に環濠がさらに発見されている。上層の積石塚は用いられる石材が大きく、石積みの墳裾と墳丘基壇の石材、さらに墳丘に積み上げられた石材は、すべて近隣で取られた硅質石灰岩を主と為す。墳丘基壇と墳裾の切石は、切石面を整えその面を外側にきれいに揃えている。残りが比較的良いN2の墳丘からみれば、墳丘の異なった部位で選択された石材は異なる。N2Z1の墳丘基壇はみな比較的大きな石灰岩の石塊で、墳裾には石塊であったり、石板や石片もあり、石灰岩石であったり花崗岩や変質片磨岩であったり、大きさも不統一である。封石の多くは角が鋭く尖った石材であり、自然に摩耗した石塊も多い。墳丘の最上層と墳丘外面の墳裾は、積石が長期に外側に露出しているため、自然に摩耗して平坦をなし稜線も不明確である。N2の墳丘は北が高く南側が低い斜面を為して墳丘が築かれている。墳丘基壇を保つため、墳裾と墳頂部面は平坦で、北から南に向かって次第に高くなるように積み上げる方法が採用されている。

積石塚内墓葬はみな石を積み上げてできた墓室で、用いられた石材はすべて石塊や石板からなり、積み上げ方は平置きや縦置きである。大型墓は掘った土壙からなり、土壙の大多数は積石塚が所在する丘陵の風化基盤層を穿ったもので、土壙の一面は階段状の様相をなし、石板を多層に精緻に積み上げ、部分的に墓の底部と頂部を石板で葺き、蓋をなす。小型墓は明確な土壙はなく、直接地面の上に石塊や石板を積み上げて墓葬を築く。単体仰身直肢葬が主であるが、単体二次葬もある。中には墓葬構造は完成しているにもかかわらず人骨が全くないものがあり、おそらくは遷葬と関係していよう。N2Z1では3 体の二次葬が発見され、男女 2 体合葬が1 基あり、また頭部と手骨のみが埋葬された一基があった。それぞれの地点には中心的な大型墓があり、N2、N3、N16の中心墓はそれぞれの地点の中心をなす。一方、中・小型墓は積石塚の南側に配置される規則がある。N2、N5の中心墓の土壙は四面が階段をなすものであり、N16の中心墓は墓壁の一面に階段が配置される。墓の頭位は東西方向が主であり、N2Z1 南部では墓が東西方向に配列されて群をなし、それぞれの墓が相接している。

紅山文化上層の積石塚はそれぞれの地点の墳丘の数量や形態が異なり、それぞれの墳丘内の墓葬数も異なっている。N3は独立墳丘で、円形で、直径約 15m、墳丘の面積と中心墓の規模は小さく、墳丘の南側から西南側に10 基の小型墓葬を置く。N5は二つの墳丘と一つの基壇からなる。東墳丘は円形をなし、直径 35m、墳丘内の中心部近くに大型墓葬が位置し、その地点の中心墓をなす。西墳丘ははなはだ大きく、墳丘の境界部は不明確である。東側には内外に二筋の直線形石壁を残し、長方形あるいは方形の墳丘であったと推測される。墳丘の南側には4 基の小型墓が置かれる。二つの墳丘の間には長方形の基壇建築がある。N16は大型墳丘を以て主となし、長方形をなし、南北長約 50m、東西幅 15mの範囲をなす、中心埋葬は花崗岩の岩脈を掘削し、中心墓葬の南側に中型墓葬 1 基、さらに南側に5 基の小型墓葬がある。N2は六つの単位からなり、5 基の墳丘と1 基の基壇からなる。西から東に向けて、Z1は長方形をなし、東西長 34m、南北幅 22m、墳丘の真ん中に2 基の1 側が階段をなす大型墓葬があり、東西対称をなす。大型墓の外周には長方形の方形墳丘が築かれ、墳丘の南側に24 基の中・小型墓葬が配置され、東西方向に四つの配列をなす。Z2は方形で、長さ17. 2 ~ 19. 5m、中心部に大型墓葬が置かれ、墓壁は階段をなす。墓壙上部に方形の基壇が築かれ、その南側に小型墓葬 3 基が配置される。この墳丘は、墳丘群の中心にあり、丘陵頂部に位置し、中心に大型墓葬を持つ。これがN2の主墳丘をなすが、惜しいことに早くに盗掘ないしは激しく破壊され、ヒトの歯のみが残り、副葬品は認められない。Z3は円形基壇式建築であり、直径 22m、淡紅色の安山岩の棒状石を墳裾とし、層をなして高まる3 層の円圏を形成し、基壇内には墓葬はみられない。Z4は上層積石塚が下層積石? に重なっており、上層積石塚は二つの墳丘が東西に相連なっている。東墳丘は北側が円形、南側が方形をなし、長さ33. 8mをなす。西墳丘は二段の墳裾をなし、下方は円形、上方は方形をなす。上層の墳丘には15 基の墓葬がある。Z5は長方形、南北長 19. 2m、東西幅 14. 6m、内側には明確な墓壙は認められないが、3 体の人骨があった。Z6はZ3の南側に位置し、墳丘は大きく乱されており、形状は不明であり、また明確な墓葬は発見されていない。N2は東西総長が135mに達し、南北幅 45mをなす。牛河梁およびその他の紅山文化遺跡でこれまでに発掘された積石塚中規模が最も大きい墳丘群である。

上層積石塚の墳丘上にはみな筒形土器が置かれている。筒形土器は墳丘の外周に沿って一列に配列されている。上層の積石塚の筒形土器と下層積石塚の筒形土器を比べれば、形態は比較的大きく、下層積石塚筒形土器の底部は口縁と同じ様な形態をなし、口縁と底部の上下差はほとんどなく、器面は大部分が無文であり、僅かに彩文が施される。上層の積石塚の筒形土器底部は縁がなく、内側に肥厚しており、口縁と底部の上下関係は不明確であり、胴部上部は凹線旋文帯が施され、胴部下部は無文ないし黒色彩絵されている。彩文には勾連花弁文、垂鱗文、三角あるいは菱形の幾何学文などが三

つの主要文様を為す。上層積石塚ではその他の特異な形の土器が発見されている。扁鉢式筒形器は、形態がややひしゃげ口縁内面が鉢の口縁状に納まり、底部は筒形器の底部のように内面肥厚する。塔形器は、この種の塔形態が一般的に大きく、造形は比較的複雑で甚だしく特異であり、瓶形の細い口縁をなし、口縁部には楕円形の対称の取手がつく。胴部上半は鼓状に膨らみ、窩点文が施され、胴部下半はすぼむ。長方形の大きな透かし孔があり、台座は複盆式を為す。彩絵が全面に巡り、その造型から推測するに、おそらく男性崇拝と関係するであろう。

N3・N16は土製人物塑像が発見されており、それらの大きさは等身大にあたる。みな泥質紅陶をなし、外面にはスリップが塗布されている。その中のN3から出土した人面の残骸は厚い破片である。N5では小型女性彫像が出土している。塑像はみな強い写実性と高い彫塑技法を持っている。

墳丘内の墓葬の副葬品は玉器を主とする。下層積石塚は3基の墓葬でしか玉器の副葬はなく、すべてが1個体の斜口筒形玉器である。上層積石塚の大部分は玉器のみが副葬され、それぞれの墓葬副葬玉器の数量は少なく、普通1～3個体で、大型墓では7～9個体であるが、副葬玉器が最も多いN2Z1M21は20個体をなす。石器が副葬されたのはただ1基のみで、N2Z1M9では1個の石鉞が副葬され、上層の積石塚の場合土器が副葬された事例はなく、規模が比較的大きい墓では玉器のみ副葬され、石器や土器の副葬がない現象が一般的であり、玉のみを副葬する習俗をなす。玉材は透閃石玉をなす。大型の玉器の縁辺には紅褐色あるいは黄白色の玉材原面を残し、玉材の由来が河原で摩耗したものを採集したことを示している。玉器の切断には少なからず擦り切り技法の痕跡があり、薄い玉板を切裁する技術を得ており、3～4cmの厚い玉板も切断することができ、穿孔には錐穿孔とともに管瑣技法もあり、直径9cmの大口径の管瑣が使用されており、正面の図案文様には影響を与えることなく、背面を斜行した管瑣穿孔が盛行している。斜口筒形玉器は糸切りを用いて大きな孔を穿孔している。文様は凹線彫刻もあるが、凸線彫刻もあり、瓦溝文と呼ばれる凸線文もあり、図案は複雑多様で、十分均整がとれている。鏤刻技術が使用され、鏤刻で稜をなす扉脊の実例が見られる。平面彫刻が多く見られるのみならず、熟練した丸彫技法も取り入れられている。玉器の種類には人形、動物形、勾雲形、斜口筒形玉器、玉璧がある。玉腕輪と玉環が多く見られる。動物形玉には龍、鳥、亀、蚕、草虫類があり、造型は多く抽象的であるが、写実性の強い作品も見られる。斜口筒形玉器は頭の下あるいは腰の間に置かれ、その造型は亀甲と関係しているであろう。勾雲形玉器は出土時に縦置きされており、孔の空いている側が上を向いており、一種の権杖と係わる玉器である。玉璧内孔は円形で、外縁は方円形をなし、内孔の縁と外縁の縁は刃のように薄く研がれている。ペアをなすような副葬の組成規律があり、双龍、双魚、双璧などからなる。N16第4号墓の副葬品の玉人は、腹が突出し、額の間は窪み、わざわざ上下が貫通しており、シャーマンが使う宝器と関係し、玉巫人と呼ばれる。積石塚上あるいは墓内では精緻に加工された細かな石器が発見されており、玉器製作の工具と係わる道具であるかもしれない。

発掘報告では試掘がなされた第1地点の女神廟（1号建築址）を簡単に紹介している。廟は竪穴式住居であり、現在残っている竪穴部分の深さは80cmである。廟は南北向きで、平面プランは主体部と付属部の二つの部分からなり、主体部には主室、北室、東西側室、南室の多室が連なり一つの構造をなし、南北18.4m、東西最高幅9m、最も狭いところが2m、南部は1辺6m、幅2.6mの南単室からなる。廟の総面積は75㎡である。廟は全体が土や木で構築されており、建築部材には石は全く用いられない。廟の縁辺には炭化した木柱や緊縛用の草本類の痕跡が見られる。試掘時には塑像の人物像、動物像、木造建築物の模造品が出土した。人物塑像の残欠は6～7個体に分かれ、3種類の規格に分かれる。人物像の等身大のものはほとんどばらばらで大多数を占めている。その中で、主室の西側からほぼ完全な頭部が出土し、付近からは左肩と腿部の座像の破片もみられた。廟の西側付近では等身大の2倍の手や腕、腿部が採集された。人体の約3倍の耳や鼻に相当する破片は、主室の中央部に位置している。動物神の塑像は、出土位置が分るものでは主室の頂部から熊の爪、北室の縁辺から鷹の爪が出土しており、この他、熊の口や下顎、鷹の羽部分がある。廟内で堆積していた最も多いものが、模倣木建築部材であり、多くは方木形をなし、規格は不統一で、幅は10～16.5cmの間にある。さらに方木と円木が直交する枘組部材の倣木品も見られる。朱色に塗られた幾何形勾連文図案の土壁もある。廟内からは大型の彩陶の塔形器、薫炉の蓋、丸底鉢式器などの特異な器系の土器が出土した。女神廟と関連する遺構には基壇と貯蔵穴がある。基壇は廟の北壁から8mの所にあり、東西に2基と北側の1基で「品」字形の配置関係をなす三つの基壇からなり、総面積は4万㎡に達する。人工的に積み上げた石壁があり、西の基壇の南石壁と女神廟の北壁は平行で、基壇と廟はセットをなす建築物であることを示している。北部基壇の北縁には大きな焼土堆積があり、人物塑像の手・腕や耳、模倣木製建築部材の断片が出土しているが、形や規格は女神廟のものとは区別があり、別の廟があるに違いないが、未だ廟址は発見されていない。西の基壇

の南側では円形土坑状遺構が発見されているが、土坑内からは特大型の陶盆が出土している。東の基壇の東南斜面には貯蔵穴があり、土坑内には多量の筒形土器の残片が埋まっており、形態は上下層積石塚の筒形罐の中間的な特徴を持っている。付近には他に幾つかの貯蔵穴が存在し、その南側の貯蔵穴からは多種型式の方器を含む多くの特異な土器が出土している。基壇の東西斜面下の地表には当時積み上げられた石墨がかろうじて残っており、石塊を積み上げて分水機能を持ったアーチ形の石墨をなす。第1地点で採集されたものには、下層積石塚の形態的特徴に相当する筒形土器片があり、貯蔵穴発見の下層と上層積石塚筒形土器の間に位置付けられる特徴から、女神廟時代は下層積石塚より遅く、上層積石塚より早いものである。

牛河梁遺跡で、その他試掘したのはN13とN15であるが、N13が重要である。この地点はほぼ10000㎡を占めている。中間の部位には版築状の土層で円丘状をなし、直径40mである。土丘以外にはもっぱら比較的大型の石灰岩の石塊を用いて積み上げたものがあり、円形の石壁は直径60mに達する。土丘の頂部には鋳銅の坩堝片があったが、土丘上面が漢代の地層に切られていたため、坩堝片は激しく動かされており、時代の特定が待たれる。この土石混築の牛河梁遺跡最大の単体建築物については、その性格や機能に関して本格的な発掘成果が待たれるところである。N15は石築建築であり、付近では鋳銅の坩堝片が発見されている。

分期の証明としては、牛河梁遺跡で既に発掘された主要な地点においてすべて新旧があり、新旧が相互に対応している。女神廟が出現した時間は、下層と上層の積石塚の間にある。諸類型の遺跡の形成過程は大体、まず下層積石塚が出現し、その後に女神廟が作られ、さらに徐々に上層積石塚が建築されていく。同時に、各々の積石塚の構造、副葬玉器の種類や造型から組み合わせに至るまで、さらには墳丘の上に置く筒形土器群など、共通性がよく認められる。織り成す山々や丘陵に分布する諸遺跡は自然地形により、山の高低に従い南北の軸線状の分布を呈する法則性を持っている。各々遺跡地点間は互いに可視でき、それらがそれぞれ孤立して存在しているわけではなく、相互に関連した遺跡群を構成している。遺跡群の分布の範囲内外には今のところ居住遺跡は発見されておらず、居住地から遠く離れた独立した祭祀遺跡である。女神廟を中心として形成されており、多くの積石塚が回りを取り巻き、独立した存在の広大な規模の祭祀中心と文化景観こそが、遼西地域が5000年前には古国時代に突入していた証拠となっている。